

ロストレター・テクニックによる利他行動測定を試み

林 直保子¹

われわれ人間は、多かれ少なかれ、人に対して良い印象を与えたいという気持ちをもっている。そのため、人々の社会的態度を直接本人に尋ねる方法には限界がある。S.ミルグラムは、人々の態度を、他者の目を意識していない場面で測定する方法として、「ロストレター・テクニック」を考案した(Milgram 1965)。ミルグラムは、コネチカット州ニューヘブンの街で、400 通もの切手を貼った手紙を落とし、その返送率を調べた。手紙の宛先は、1) 医療研究協会、2) ワルター・カーナップ様(個人名)、3) 共産主義支援組織、4) ナチズム支援組織の4種類のうちいずれかが書かれていた²。ミルグラムは、ロストレター・テクニックを、人々がさまざまな社会集団に対してもっている態度を測定することができる方法であると考えたのである。実験の結果、後者2つの宛先が書かれた手紙の返送率は、前者2つに比べずっと低かった。

宛先が書かれた手紙を見つけた人が、わざわざ立ち止まって手紙を拾い、その手紙を投函したとしても、その人本人にはメリットはない。したがって、放置された手紙を拾って投函する行為は、純粋に利他的な行為といえる。ロストレター・テクニックは、さまざまなコミュニティにおける利他的な行動規範を測定する目的で利用することができるだろう。本稿では、大阪府内の3つの地域でロストレター・テクニック実験を行った結果を報告する。

実験は、2017年10月5日午後、大学のゼミ活動の一環として行われた。実験者は2人または3人でチームを組み、1地点を担当した。この実験では、ミルグラムの実験とは異なり、手紙ではなくハガキを用いた。封をした手紙は中身を確認することができないため、その手紙を投函することにより差出人または宛先人にとって何か不都合な結果が生じる可能性が否定できない。ミルグラムの実験が行われた時代に比べ、現代では個人に関する情報の管理は格段に繊細なものとなっており、善意があっても実際に手紙を投函することを躊躇する人々がいることは想像に難くない。この実験では、投函することで不都合なことが起きないことがはっきりとわかる状況をつくるため、書かれた内容が確認できるハガキを使用した。また、ダイレクトメールのように、届かない場合の不利益が送り手と受け手の双方にとって無視できるほど小さいものではなく、個人的な付き合いのある人間同士の社会的な意味のあるやりとりであることがわかるように、文面は、大学時代の恩師に宛てて、転職による新生活のスタートを報告する挨拶状とした。

ハガキを落とす際、実験者は、人通りが少ないタイミングを狙い、スマートフォンを扱いながら

¹ 関西大学社会学部教授

² この実験では、宛先だけでなく、手紙を放置する場所についても、a) 商店内、b) 自動車のフロントガラスのワイパーに挟む(鉛筆で“自動車の近くで拾った”と書いてある)、c) 舗道の上、d) 公衆電話ボックス内の4条件が設定された。

ポストにハガキを投函しようとしてハガキが投函口に入らずに地面に落ちたことに気づかず立ち去る演技をした。そして実験者は、少し離れた場所で通行人の様子を観察し、ハガキに気づいた様子を見せた通行人の性別や推定年齢、ハガキに対してどのような行動をとったかを記録した³。

実験の実施場所として、コミュニティの特徴の異なる以下の3地点(各地点2か所の計6か所)を選定した。大阪の代表的な繁華街として、Aの梅田地区を選定した。また、北摂の住宅地として吹田市のJRと阪急駅前、大阪南部の住宅地として西成区の区役所付近と駅前を選定した。

- A. 大阪市北区梅田 (JR 御堂筋北口付近・JR 大阪駅直結商業ビル前)
- B. 大阪府吹田市 (JR 吹田駅前・阪急豊津駅前)
- C. 大阪市西成区 (西成区役所前・地下鉄天下茶屋駅隣接商業ビル前)

JR吹田駅前の調査地点は人通りが少なく、実験中ハガキに気づいた通行人は4名であったが、うち3名がハガキを拾って投函した。阪急豊津駅では、人通りは比較的多かったが、ポストの周囲にコーンなどがあり、ハガキに気づく人が少なかった。結果的に、12名がハガキに気づき、4名が投函した(表)。

梅田調査地点のJR御堂筋北口付近では、工事現場近くとなっており、ポスト周辺の人通りは少なく、ポストを利用する人が近づくような場所だった。ここではハガキに気づいた9名のうち4名が投函した。商業ビル前のポスト周辺は、人通りは多かったが駅を利用する人や仕事からしき人が目立ったが、やはり9名中4名が投函した。

西成調査地点では、2か所の調査地点のいずれも交通量は多く、そのほとんどが自転車に乗った人であった。自転車に乗っているためか、ハガキに気づいてもそのまま通り過ぎる人が多く、合わせて30人の通行者のうち、21人が通り過ぎ、9名が投函した。

表 ロストレターに気づいた人の行動と返送率

	西成	吹田	梅田
無視	21 70.0%	9 56.3%	10 55.6%
投函	9 30.0%	7 43.8%	8 44.4%
落とした数	9	7	8
返送された数	9 100%	7 100%	8 100%

※落とした数は風で飛ばされた分を含まない。

このように、梅田、吹田の2地点では、ハガキに気づいた人々のうち、非常に多くの方がハガキを拾って投函していた。西成ではやや投函率は低かったが、これは通行人の多くが自転車に乗っていたという明確な理由がある。また、前述したように、実験者は少し離れた場所で立ち話を装って通行人を観察していたが、西成地点では、ハガキに気づき自転車から降りて投函した男性

³ 観察の際、通行人が他者から観察されていることを自覚しないよう立ち話している様子を装った。

や、自転車で通行中にハガキを見つけ、いったんは通り過ぎたものの引き返し、自転車を近くの駐輪場に停めてからポストに戻りハガキを投函した男性が観察された。自転車をわざわざ停めて投函することは、徒歩で通りがかって投函するよりもコストが大きいため、この地区ではむしろ高い利他性が確認されたともいえる。同地点ではさらに、ハガキを見つけて投函するかどうかをしばらく相談した後に、「ポストの下に落ちていました」という付箋を貼って投函した女子高生2人組も観察された。3地点の調査者はそれぞれ10枚のハガキを持って調査に向かったのだが、結果的に、人通りが少なく時間内に落とすきれなかった分と、風に飛ばされて回収できなかった分(1枚)を除いて、すべてのハガキが投函され、あて先住所に返送された。

コミュニティ間でロストレターの返送率を比較する場合、手紙のを見つけやすさや人通りなどの地理的条件を統制することが難しいという問題がある。しかしながら、現代社会においてもロストレター・テクニックを用いて人々の利他行動を測定することができることを示した点で、本実験には意義があったと言えるだろう。

文献

Milgram, Stanley, Leon Mann, Susan Harter, 1965, “The Lost-Letter Technique: A Tool of Social Research,” *Public Opinion Quarterly*, 29(3), 437.